2017.2.21

博物館 Dictionary No.197

◆あなたに語る・時代を超えて生きる心◆

平成知新館2F-4（近世絵画）に展示されている「綰柳詩画巻」について勉強してみよう。

旅立つ友への贈りもの

もうすく卒業シーズン。卒業式の日には、みなさんはどんなふうに先生や友達とのお別れをするでしょうか。一緒に写真を撮ったり、みんなで寄せ書きをしたり、もしかしたら手紙やプレゼントを贈りあったりするかもしれませんね。離ればなれになっても、ともに学校生活を送った大切な人たちのことを、そして大切な人たちと過ごしたかけがえのない時間のことをいつでもすぐそばに感じられるように、私たちはたしかな手ざわりのある何かを手元に置いておきたいと思うのでしょう。

そういう気持ちは、もちろん江戸時代の人たちにとっても変わることはありませんでした。いや、メールも電話もなく、飛行機も新幹線もない時代だからこそ、人との別れは現代の私たちよりもずっと深刻で切実なことだったといえるかもしれません。なにしろ、庶民の移動は徒歩が基本。江戸（現在の東京）と京都を結ぶ東海道の距離はだいたい500㎞弱で、おとなでも歩いて２週間はかかる道のりだったようです。しかも、一日に10里（約40㎞）も歩いて２週間です。40㎞といえばフルマラソンとほとんど同じ距離ですから、それがどれほどたいへんなことか簡単に想像がつくでしょう。いまでは新幹線で２時間ちょっとの距離でも、昔の人たちにとっては決して気軽な旅行などではなかったのです。

そんな江戸時代を生きた人たちは、人との出会いや別れをとりわけ大事にしていたように思えます。そのことをよく示す、「綰柳詩画巻」（図１）という巻物を見てみましょう。

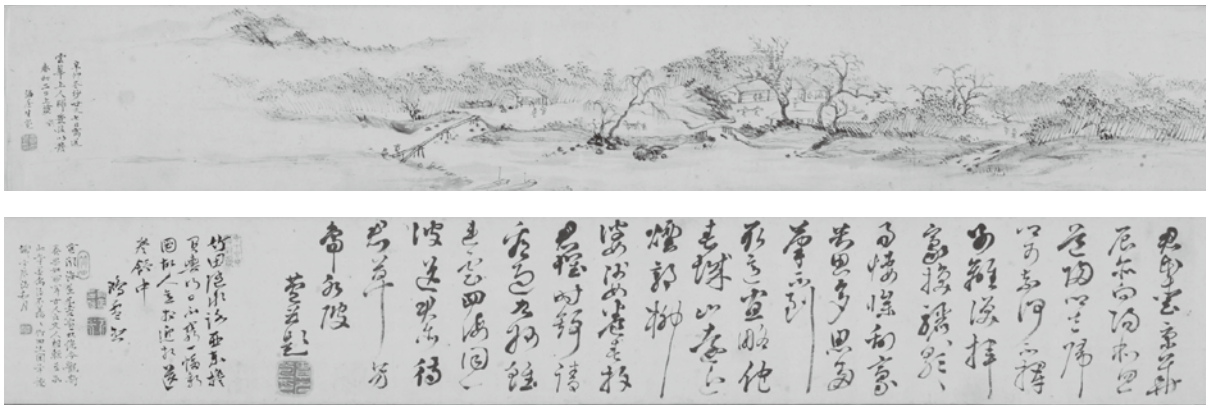

図１　貫名海屋筆「綰柳詩画巻」（部分）、個人蔵

この作品は、遠くへ去っていく友人のために作り、送別の品として贈ったものです。絵を描いたのは、貫名海屋（1778～1863）という書家。海屋は、市河米庵・巻菱湖とともに「幕末の三筆」と呼ばれるほどに、書家としてたいへん有名な人です。いっぽうで、絵も一流の先生に学んで習得しており、画家としても高い人気を誇りました。しかも、海屋は学者でもあった人で、京都で塾を開き、儒学（中国古来の政治・道徳に関する学問）という学問を教えてもいたのです。

さて、その海屋の友人に、雲華上人（1773～1850）という浄土真宗のお坊さんがいました。雲華は、豊後国岡藩竹田村（現在の大分県竹田市）に生まれた人です。やがてその学識を買われ、本山の東本願寺に招かれて教鞭をとるようになると、京都の地で多くの文化人と交友を結びました。

お互いによその土地から上京し、親しい友人となった雲華と海屋でしたが、天保３年（1832）春、雲華は一時ふるさとに帰るため京都を離れることになりました。このとき、海屋が雲華に描き贈ったのが「綰柳詩画巻」にほかなりません。「綰柳」とは、送別の際に、柳の枝を輪のように結んだ中国の古い風習のこと。柳の枝が一周するのと同じように、旅立つ人がふたたび無事に戻ってくるようにとの願いが込められているのです。ここに描かれた、洛中から伏見にいたる街道沿いの様子は、おそらく見送りの道行きでふたりが目にした光景だったのでしょう。

１月４日に京を発った雲華は、同月の27日にようやく豊前国中津（現在の大分県中津市）に到着します。その旅の途中、雲華はときどきこの巻物を広げ、京都で友と過ごした時間にしばし思いを馳せたにちがいありません。

海屋からの贈りものをいたく気に入った雲華は、同じく故郷に戻っていた同郷の画家・田能村竹田（1777～1835）にこの作品を見せています。その優れたできばえに感銘を受けた竹田は、書と絵がともにすばらしいという絶賛のことばを巻物の最後に書き入れました。竹田は、翌年出版した著作でこの作品に触れ、自分が見た「三大真景図巻」（現実の風景を描いた巻物ベストスリー）のひとつだと断言しています。

しばしのお別れ、とはいえ、それがいつ永遠のお別れになるかは誰にもわかりません。実際、雲華が京都で別れを惜しんだもうひとりの友人・頼山陽（1780～1832）は、この年の９月に急逝し、ふたたび会うことはありませんでした。

当然のことながら、いまやこの作品を生み出した海屋・雲華・竹田の３人は世を去り、作品を鑑賞している私たちにもいずれは旅立ちの日がやってきます。それでもこの作品があるかぎり、３人の友情と、彼らの営みが私たちの心に刻んだ何ものかは、けっして消えることはないでしょう。私はそこに、「文化」のかぎりない可能性と力を感じます。

（美術室　研究員　福士雄也）

印刷・富士印刷社